



平成 30 年 10 月 23 日

国際審判員 松田 雅彦
(神奈川県ボート協会)

2018 World Rowing Masters Regatta (27th, Sep, – 30th, Sep, 2018 Sarasota-Bradenton, USA)

I. はじめに

2018 年 9 月 27 日 (水) から 9 月 30 日 (日) に Sarasota-Bradenton, USA で開催されました World Rowing Masters Regatta に国際審判員として参加致しましたので、審判業務及び大会概要につきましてご報告申し上げます。

9 月 24 日 (火) 15 時 30 分羽田発、ロサンゼルス、アトランタと 2 回乗り継ぎ、現地時間 24 日 (火) 23 時 50 分 Sarasota 空港に到着した。時差約 14 時間。深夜の到着であったが出迎者が到着出口付近で待機しており、問題無くホテルに到着した。海外渡航が不慣れな者にはこの丁寧な出迎えは非常に有り難いものである。問題無くホテルに到着したが、スーツケースの中をチェックされた形跡があった。テロ対策で無作為に中身を確認する可能性があるとは聞いていたが丁寧に扱って欲しいものである。

帰りはレース終了後の便であった為、会場にスーツケースを運び直接 Sarasota 空港に向かった。簡単な事であるが、Check out のタイミングや会場のどこで Pick up となるか事前に確認しておくべきであろう。余談であるが帰国は Sarasota からアトランタ、ロサンゼルス、ポートランド経由で 3 回乗り継ぎであった。ポートランド経由を失念しており、南国の恰好のまま同空港内で待つ事となった。審判業務も同じだが常に先を読んだ行動が必要である。

通常 FISA 大会の国際審判 (ITO) は約 18 名で構成されるが、WRMR は約 25 名で構成される為、申請すると比較的選ばれ易い。但し、レース数が多く、クルーの力量も様々であるので大変な大会であるが。

II. 大会概要

1. 大会日程

9 月 26 日 (水) 13:00～	Jury Meeting
17:30～20:00	Opening Ceremony
9 月 27 日 (木) Racing	
18:00～	Dinner with ITO and NTO
9 月 28 日 (金) Racing	
16:00～19:00	Umpire Seminar
9 月 29 日 (土) Racing	
9 月 30 日 (日) Racing (Mixed)	

大会は 08 時 00 分から 16 時 00 分頃まで概ね 3 分間隔で行われた。世界各国から多くのクルーが参加する大会である。過密なレーススケジュールであるので審判団も 1 日を 4 つの時間帯に分け、早番、遅番の 2 班体制で行動した。本大会の宿泊先はコースから徒歩約 10 分で合ったので、各班は定められた時間に車若しくは徒歩でコースに集合した。

Masters は年齢別（下記御参照）に分けられ、レース毎に勝敗を決めるものである。レーンより出漕者が多い場合、そのカテゴリの全出漕者を数組に分け、各々のレースで 1 位のみメダルが授与される。勿論、異なるカテゴリを同一レースで行う事もあり、カテゴリ対して授与される。FISA Rule 及び大会要項ではユニフォームは統一する様に記載されているが、若干の違いであれば不問とする様にとの記載もあり、P.Jury から明らかな違いがある場合は ITO の判断で Yellow Card を与える様指示された。（アンダーシャツの袖の長さが異なっても色が同じであれば可とされた）又、FISA Rule には Mixed race はユニフォームを統一する必要は無いと記載されている。今大会でもかなりの服装の不統一が見られたが、Masters という事で受け入れられている様である。CC での ID Check は Res.CC の判断でクルーからランダムにチョイスし、各クルー 1 名～2 名の Check で良いとされた。参加クルーが多く Pontoon が混雑する事を避ける為であると思料。艇計量は行わなかった。

艇のレンタルは発艇定刻の 40 分前からとされており、リギングの時間を考えるとかなりタイトなものであるだろう。

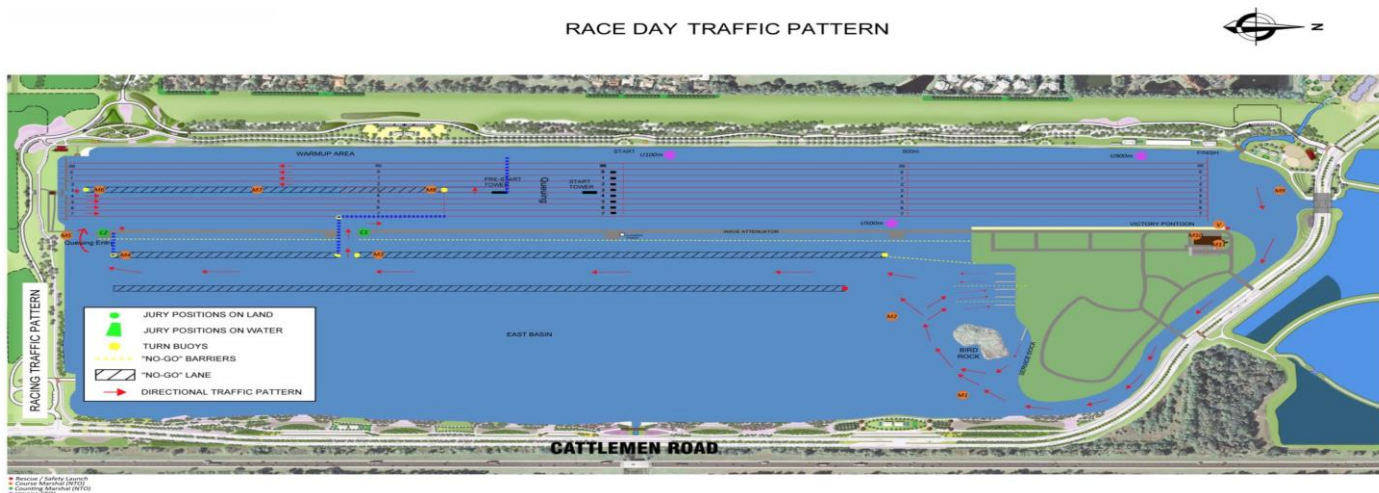
Bow Number の配布は発艇定刻から 1 時間前。この配布も NTO が担当した。

2. コース

Sarasota-Bradenton Course

本コースは全長約 2180m、幅は 630m 有り 13.5m を 8 レーン、平均水深約 6m、練習水域も確保されたコースである。2017 年世界選手権が開催されたコースであり、日本から田畑氏が国際審判員（ITO）として参加された。総工費約 50 億円を費やし整備されたが、資金不足で発艇、線審、判定塔、コースブイ、コースと練習水域を分ける仮設通路等は建設されたが、ボートハウスは建設出来なかったとの事。本コースは国内外含め多くの大会が開催されており、艇はトレーラーで運送している。北部在住の学生が冬場合宿で当地を使用する事も多い。

この地域は夕方になると雷雨となる事が多い。その為、雷雨時の緊急避難の要領も予め説明された。



湖の周囲は舗装されており散歩、ジョギング、サイクリング等が行われている。

レースは 1 レーンから 8 レーン全てのレーンを使用した。コースと回漕場所は通路で仕切られており、

世界選手権時はこの仮設通路に小型電動自動車を撮影班が使用したとの事。尚、この通路は波除けも兼ねて恒常的に設置されているとの事。今大会は Cool Down は一切禁止とした。参加クルーが多く接触等の危険がある為、レース終了後は速やかに Pontoon に戻る様クルーに指示した。

今大会は 1000m レースであるので、レースは 1000m→2000m を使用し、0m→1000m は warming up area となった。

3. Masters Regatta

①種目

Men	1X, 2X, 2-, 4X, 4+, 4-, 8+
Women	1X, 2X, 2-, 4X, 4+, 4-, 8+
Mixed	2X, 4X, 8+

②Age Category

- A - Minimum age: 27 years,
- B - Average age: 36 years or more
- C - Average age: 43 years or more
- D - Average age: 50 years or more
- E - Average age: 55 years or more
- F - Average age: 60 years or more
- G - Average age: 65 years or more
- H - Average age: 70 years or more
- I - Average age: 75 years or more
- J - Average age: 80 years or more
- K - Average age: 83 years or more
- L - Average age: 86 years or more
- M - Average age: 89 years or more

マスターズは 27 歳以上が出漕出来る。上記の平均年齢は Crew のみで Cox は含まない。

又、Mixed Crew(混成)は Cox を除き男女半々。又、FISA Rule 改定通り性別は問わない(男子種目に女性 Cox の参加は認められ、その逆も可) その際の体重制限は男性 Cox も女性 Cox も Rule 通り 55kg とする。今大会では Cox 計量は決められた場所で全員行うのではなく、CC 担当の Jury の判断で体重が疑わしい (Dead Weight の必要があるのでは?) Cox のみ計量する様に、との指示があった。結果として疑わしい Cox はいなかったので計量はしなかった。

上記の年齢制限で 80 歳以上を 3 歳毎とした事は特筆すべきであろう。メダル獲得を目指す高齢漕手にとっては励みになるのではないかと思料する。

4. 参加審判員 (ITO)

Jury Members (23ヶ国 合計 26名)	NFS	Lic No.
① Appleyard Robert (P.Jury)	USA	1109
② Reilly Jean (Deputy P.Jury)	USA	1367
③ Fraser Phillip	AUS	1550
④ Anselm Horst	AUT	1271
⑤ De Jonge Yves	BEL	1613

⑥	Moreira De Souza Magali	BRA	1244
⑦	Ljubic Duro	CRO	1221
⑧	Hansen Morten Juel	DEN	1561
⑨	Marquez Escudero Pedro	ESP	1513
⑩	Forshaw Eleanor	FRA	1672
⑪	Ibbotson Paddy	GBR	1451
⑫	Packer Judith	GBR	1569
⑬	Engelmann Erhard	GER	1120
⑭	Wong Kar Man Carmen	HKG	1780
⑮	Szanto Eva	HUN	1383
⑯	Meszaros Judit	HUN	1751
⑰	Matsuda Masahiko	JPN	1614
⑱	Lee Kihyun	KOR	1604
⑲	Nieberg Steven	NED	1334
⑳	Walker Simon	NZL	1554
㉑	Tord Jose Antonio	PER	1779
㉒	Wolny Marszalek Marta	POL	1132
㉓	Alupei Dorin	ROU	1465
㉔	Mones Camara Alfredo Martin	URU	1757
㉕	Gallagher Erin	USA	1686
㉖	Jones Doug	USA	1688

NTO は地元 USA のみでなく各国からも派遣されていた。NTO は合計 38 名、合計 64 名の Jury Member であった。2016 年 Copenhagen での WRMR でも各国多くの NTO が参加していた。これは人数不足を補う意味もあるが、NTO として大会経験を積む意味もあると思料する。

今大会の NTO には 2016 年 Copenhagen で開催された WRMR で P.Jury を務めた Mr.Chiris Lars も参加しており、Outponton では精力的に業務に従事していた。陽気な性格の彼は国内外でも信頼は厚いようである。Copenhagen の WRMR では小生を Starter に配置する等かなり Risky な面もあったが。。

開催地で公用語が英語である場合外国人 NTO の参加に問題無いが、日本の場合、日本人同志の連絡用として無線系統を用意する等の措置が必要と思料する。

5. 審判業務

①審判部署 (小生)

• Sep, 27th	: 08 時 00 分~10 時 00 分	Umpire 2
(Thu)	10 時 00 分~12 時 00 分	Waiting
	12 時 00 分~14 時 00 分	Res.CC
	14 時 00 分~16 時 00 分	Waitng
• Sep, 28th	: 08 時 00 分~10 時 00 分	CC(Outgoing)
(Fri)	10 時 00 分~12 時 00 分	Waiting
	12 時 00 分~14 時 00 分	Umpire 2
	14 時 00 分~16 時 00 分	Waiting
• Sep, 29th	: 08 時 00 分~10 時 00 分	Umpire 1

(Sat)	10時00分～12時00分	Waiting
	12時00分～14時00分	Judge at Finish
	14時00分～16時00分	Waiting
・ Sep, 30th	: 08時00分～10時00分	Waiting
(Sun)	10時00分～12時00分	Victory Pontoon

Masters は通常の大会と異なり、参加クルーが多い為、Marshal を設置する事によりスムーズな大会運営を行っている。Counting Marshal が出艇しているクルーをチェックし、Starter 及び Pre Starter は発艇エリアに来ていないクルーがあるとまずこの Counting Marshal に通過の有無を確認した。通常であれば Starter は CC に出艇したか否かの確認をするが、クルーが多過ぎる為、Pontoon 毎に出艇を取り纏めるよりも、この Counting Marshal が一元的に管理する方が早い。非常に合理的な考え方である。この部署は NTO が担当した。

今大会は Pre-Starter, Outgoing 及び Counting Marshal に Tablet Computer が配布され NTO が出艇クルーを入力した。Pre-Starter は Tablet で出艇クルーを確認する事が出来るので、無線での問い合わせの手間を省く事が出来る。この Tablet (パナソニック製) は炎天下の Sarasota であって冷却の必要は無く freeze する事は無かったとの事。因みに 2016 年 WRMR (Copenhagen) ではこの Tablet は無かった。数年で状況は変化していく常に大会参加し最新の情報を入手すべきであろう。

通常の大会に使用する Bow Number は数字のみ記載しているが、Masters 大会では出艇クルーが多い為、以下の通り A1, B1 の様にアルファベットと組み合わせたものであった。

A- Alpha	J-Juliet	S-Sierra
B- Bravo	K-Kilo	T-Tongo
C- Charlie	L-Limo	U-Uniform
D- Delta	M-Mike	V-Victor
E- Echo	N-November	W-Whisky
F- Foxtrot	O-Oscar	X-X-ray
G- Golf	P-Papa	Y-Yankee
H- Hotel	Q-Quebec	Z-Zulu
I- India	R-Romeo	

CC は例えば D1 であれば「Delta 1」とクルーを特定して無線で確認した。これは通常の大会で水上に出艇しているクルー数が約 48 クルーに対して、Masters 大会が約 160 クルーに及ぶ事への対応である。大会プログラムにも全てこのアルファベットと数字が記載されていた。

通常の大会であればブレードカラー、ユニフォーム、Bow Number からクルーを特定するが、クルーが多く、ブレードカラーも統一されていないこの大会ではそれは出来ない。アルファベットと数字の組み合わせであれば同じ Bow Number を付けたクルーが同時間帯に水上にいる事はあり得ない。これも大会運営のノウハウであろう。

尚、各部署の人員は以下の通り。ITO は国際審判員、NTO は国内審判員。
部署とその役割を特筆すべきもののみ以下の通り記載する。

a) Marshal 1～9 NTO
Pontoon から Warming up area まで各場所に Marshal が配置される。

b) Assistant Pre-starter NTO
発艇付近の Warm up area に位置し、2～3 レース先の出漕クルーが付近にいるか確認する。次のレースとなったら速やかにレーンに誘導する。

c) Pre-Starter ITO
次のレースに出漕するクルーをレーンに速やかに誘導する。2～3 レース先のレースに出漕するクルーを待機させる。クルーが多い為、この部署は重要である。3 分間隔のレースであると、該当レーン後方に上手くクルーを誘導しておかなければならない。この Pre-Starter は WRMR にとっては重要である。レーンごとにクルーを発艇後方に待機させ、スタート後速やかにクルーを前進させる。3 分間隔で行うにはこの部署が機能しなければレースは遅れるだけである。逆に言うと、発艇後方にはクルーをレーンごとに待機させるスペースが必要となる。



左が発艇、右が Pre-Start

d) Starter(発艇) ITO 1 人
通常の業務手順は省略するが、本大会の場合、3 分間隔という超過密スケジュールであるので、クルーに対し速やかにレーンに入る様促す。
クルーを call する場合は、団体名は呼ばず国名で。同一国の混成クルーは”Composite”、各国の混成クルーは”International”とした。
今大会においては過密スケジュールの為、トラブルが起こっても原則的に 10 分以上待たない。

e) Assistant Starter NTO 1 人
f) Aligner NTO 1 人
g) Judge at Start (線審) ITO 1 人
h) Umpire1,2,3(主審 審判艇は 3 艇) ITO 1 人、Driver 1 人 (1 艇当り)
i) Resp. Judge at Finish (判定) ITO 1 人、
j) Finish Judge ITO 1 人
k) Assistant at Finish NTO 1 人
l) Marshal After Finish ITO 1 人 NTO 1 人

優勝クルーを表彰棧橋に、他のクルーを速やかに帰艇する様指示する。

m) Counting Marshal 1,2	NTO 2 人
n) Resp.Control Commission	ITO 1 人
o) Control Commission	ITO 2 人 NTO 6 人
p) Victory Pontoon	ITO 1 人 NTO 1 人

②業務に関して

大会前日 9 月 26 (水)13 時 00 分より Jury Meeting を行った。簡単な自己紹介及び WRMR 特有のクルー数の多さに対応する説明であった。その後、水上及び陸上設備の視察を行った。

今大会も Zonal Umpiring (定められた Zone を担当する主審)で行った。Umpire 1 は 100m 付近、Umpire 2 は約 500m 付近、Umpire 3 はフィニッシュ付近で監視する。必要に応じてコース内に入り対処する。接触の可能性がある場合は必要に応じてコース内に侵入し適切な対応を取る。WRMR はクルーの力量が様々であるので Zonal UMP は好ましくないのであるが、3 分間隔である事を考慮すると Zonal を選択せざるを得ないと思料する。可能であれば審判艇を 4 艇にする等、待機位置の距離を縮める方が良いのではないかと思料する。

国際大会では国内大会の様な終了後の Meeting を行わないので、トラブル等が発生しても判らない事が多い。各部署で感じた事及び小生が見聞きしたもののみ記載する。

a) レース No.1007 W1X(A)で 5 レーン USA がスタート直後沈した。Umpire 1 が急行、救助、同クルーは棄権とした。この救助は Umpire 1 によって行われ Rescue Boat は対応しなかった。Umpire 1 は艇を掴みクルーを再乗艇させた後、コースアウトさせ自力で帰艇させた。スムーズな対応ではあったが、Rescue を呼び艇ごとコースアウトさせ次レースをスタートさせる方がよりスムーズかと思料する。

本件に関連する事であるが、翌日のレース No.2123 W8+のスタート前に練習区域でレスキューを必要とする事象が発生し、Umpire 1 がその対応をした。Umpire 1 が戻らないまま当該レースを発艇させたが、スタート直後から 6 レーン(USA)が 5 レーン側を航行し、200m 付近から 5 レーンを航行し始めた。発艇から 500m 待機の Umpire 2 にその旨無線にて連絡があり、500m 付近からコースに入り、6 レーンを警告したものの自己のレーンに戻れず、約 2 艇身の差でフィニッシュした。クルーから Objection は無く審判業務は Umpire 3 に引き継ぎ、Umpire 3 が白旗を揚げた。Umpire 2 は約 800m 付近で停止し Umpire 3 に引き継いだ。本件の場合 Umpire 2 が白旗を揚げるべきであったと思料する。唯、本件はそもそもレスキュー対応を Umpire 1 が行った事が原因でもある。

今大会では 1X で沈した場合、ほぼ再乗艇させコースアウトさせて Pontoon に戻した。

b) Res.CC では小生の不手際が露呈した。USA クルーから Uniform の不統一で警告を受けたとの申し出があった。このクルーは Composite Crew(同一国での異なる団体で構成、国が異なる場合は International)で予め FISA Office に uniform については FISA Rule Appendix 11 2.Racing Uniform 2.1.2 (Composite Crew は各団体の Uniform でもよい) が適用されるとメールで回答を貰っているとの事。(このメールを小生に提示した)小生が回答に困っていると CC の NTO の一人が横から口出し、この言葉にクルーが不快感を示した。この様なクレームの場合、1 対 1 で話すべきであり、横からの口出しは制止しなければならない。

CC配置のITOのアドバイスもあり、JuryはComposite CrewであってもFISA Rule Appendix 20(Masters) 9 (Rowers Clothing)に従い、Uniformは統一する様に本大会では指示されていると説明、必要であれば本部に問い合わせしてほしいと回答、クルーも納得した。本件をP.Jury Mr.Robertに報告した処、FISA Masters Commi.とUmpiring Commi.でUniformに対する見解が相違しており、Upsetしているとの事。次大会では本件を反映した変更がある可能性有。本件での小生の問題点は語学力もあるが、FISA Rule上のUniformの説明を理解していなかった事、又、Res.CCとしてNTOをコントロール出来ていなかった事である。自戒の念として記載しておくが、次回以降の大会にこの経験を生かしたい。

本件以外でもUniformについての問い合わせがCCに数件あった。個人的な考えであるがMastersはUniformについてはある程度緩和する方が好ましいであろう。

- c) 大会2日目、M4-(USA)クルーがOutgoing Pontoonから出艇した後(棧橋から100m付近)で浸水し沈した。原因は艇のカンバスに亀裂が入っていたとの事。レスキューに救助されたが、この艇の付近にMarshal艇がおりCCから無線で救助に向かう様指示したが動かず、レスキュー艇が駆け付けた時には艇は沈没寸前であった。CCの面々もMarshalの対応に不信感を抱いていた。審判控室でP.Juryと当該MarshalのNTOが話しているのを聞いていたが、当該NTO曰く、「自分の優先すべきDutyは監視であり救助ではない。救助はレスキュー艇のDuty」との事。NTO指導の重要性を感じた。
- d) W4Xの発艇で6レーンのクルーがステッキから離れたが、線審は白旗を降ろさずそのまま発艇した。レース後7レーンのクルーからProtestの提出があったとの事。レースは成立となったが、P.Juryは線審に白旗を降ろす(今大会はランプではなく旗を使用)、又、発艇と連携を取る等の対応が必要であったと指摘した。アジアの大会に参加してもそうであったが、線審旗の場合、発艇後すぐに線審旗は降ろす傾向にある。この点は国内の動作である100mまで線審旗は保持する方が判り易いであろう。
- e) 判定はITO2名、NTO1名で、写真判定装置を使用し、主席判定員が”Official”とするもの。今大会で困難であったのは、上記の通りBow Numberにアルファベットと数字を記載するので判定部署の様には水上から離れた場所であるとよく見えない。双眼鏡を使って覗いたが3分間隔、8艇レースでは辛いものが有る。又、主席判定員は無線から入ってくる棄権か否かのやり取り(主にStarter, Pre-Starter, Counting Marshal)を良く聞き、棄権の有無を確認する。又、3分間隔であると、遅いクルーは次のレースのクルーに追い抜かれる珍事が発生する。小生が判定を担当した時も、W1X(J)が次レースのM1Xに800m付近で追い抜かれる事態があった。750m付近で待機していたUmpire 3がCourse outする様呼びかけ接触は免れた。W1Xの動きを見ていたが、当人も追い抜かれる事は判っている様でゆっくりCourse outしようとしていた。(勿論、審判艇から指示もあったが)Masters大会らしい一面であろう。
- 小生が判定時に、M1Xでレース途中沈が発生し、救助艇により同クルーは再乗艇した。本来であれば同クルーをCourse Outさせ帰艇棧橋に返すべきなのであるが、コース内を航行しフィニッシュラインを通過した。勿論ブザーは鳴らさず、沈したクルーとしてDNFとすると判定部署では理解し小生からもRes.Judge at Finish (Alupei Dorin ROU)に伝えたのだが、画面のみを見ていたDorinは同クルーの着順をつけてしまい、訂正するのに時間を要していた。ここでもFinish Judgeの小生がはっきりと事実を伝えるべきであった。

- f) 本大会では少なからず接触もあった。スタート 100m 以内であれば発艇がレースを中止し無線でレースを止める様指示し再レースを行うのだが、Zonal Umpire の場合、待機位置から離れた場所であると接触の有無を把握するのが困難である。本大会でも下位の軽微な接触は不問とする事があった様だ。
- g) 最終日は Victory Pontoon を担当した。判定から 1 着のクルーの連絡があり、Marshal が当該クルーを Victory Pontoon に誘導、ITO がクルーの ID を確認、「Confirm」するとメダル授与となる。国旗を手に、又、国家斉唱するクルーもあった。



- h) 栈橋で靴の紛失がいくつかあった。大会によってはボランティアがクルー毎に靴をビニール袋に入れて管理する事もあったが、今大会は自己管理であり、クルーによっては艇内に入れていた。栈橋に置く事は間違える事が多いので大会側で管理するか、艇内に持ち込むかの方法が無難であろう。
- i) 本大会でも Doping 要員が配置されていた。Inpontoon から選手を誘導する担当であるが、結果として Doping Test が為されたか否かは判らない。WRMR であるので、Doping Test も必要だとの考えだと思料するが、高齢者に Doping Test をするとどの様な結果になるか興味はある。(高齢者は様々な薬を服用していると思うのだが。)

III. FISA Umpire Seminar

今大会中に FISA Umpire Seminar が開催された。FISA Umpire 資格はこのセミナーを受講する事により 4 年間資格を更新する事が出来る。セミナーは FISA Umpiring Commi.の Ines Hammami Hafsa(TUN)と Vladimir Meglic(SLO)により行われた。セミナーは当初 2 日間に分けて開催される予定であったが、都合により大会 2 日目レース終了後(16時00分~19時00分)の 1 回のみであった。いつも通りスライドを使用する予定であったが、当地の会議室にはカーテンが無く部屋を暗くする事が出来ない。ヒアリング力は決して高くない小生にとっては辛いものがある。内容は FISA 概要及び Advertising であった。

IV. 各写真



スタート



線審 (艇の長さに合わせて見通しを動かす)



判定



写真判定



判定塔



栈橋



コース



出艇栈橋



手荷物預かり

WP 用エルゴ (約 30 台)



仮設スタンド (左は判定塔)



会場 (判定塔から)



Victory Pontoon と審判艇



帰艇栈橋



仮設トイレ (障害者用も設置)



艇置き場

V. 終わりに

レース数が多く、クルーの力量も様々であったので審判員として苦勞する大会であった。通常の FISA 大会はトップレベルの選手が出漕するので、それ程トラブルは発生しないと思うが、本大会は国内大会以上のトラブルがあったと思料する。個人的な反省点は、FISA Rule の理解力及び語学力を向上させる事である。迅速に状況を判断し決断を下さなければならないのだが、それが出来ておらず、又、まだまだ担当部署を取り纏める事が出来てない事を痛感した。通常の FISA 大会に参加しても得る事が出来ない経験が出来たので、反省材料とし次大会に生かしたい。

国際大会に参加して思うのは大会を支える NTO の重要性であろう。ある日の朝食時に GBR から NTO として参加している審判員に「WRMR はトラブルが多く、会話の苦手な小生は不安だ」と漏らした処、「マツダ、NTO を頼れ」と言われた。地元のコースを熟知し、又、審判業務に精通する NTO を多く確保する事が大会を成功させる近道であろう。日本で開催する場合、外国人 NTO との連絡体制を整備する必要がある。日本人のみの NTO であると専用の無線系統で連絡を取り合う事で良いが、そこに外国人が加わるとある程度語学堪能者 (通訳) が必要となる。特に迅速な判断が必要となる水上 Marshal 及び審判艇ドライバーは重要

であろう。

本大会には日本から田畑氏（愛知県 A 級 国際審判員）が NTO として参加した。田畑氏はこの大会後にブエノスアイレスで開催されるユースオリンピックに国際審判員(ITO)として参加する。審判員に日本人がいると心強いものである。田畑氏は国際審判経験が長く海外審判仲間も多い。日本の大会同様堂々とした立ち振る舞いをしていた。国内では同姓の田畑氏（北海道 A 級）がいるのでユニークなニックネームで呼ばれる事もあるが、その様な人柄は国内外問わず他者を惹きつけるのであろう。

最後になりましたが、本大会に派遣させて頂きました事につきまして、関係各位に心より感謝を申し上げます。

以 上